

府立高等学校の将来像
検討報告書
(骨子案)

平成24年12月

府立高等学校の将来像検討専門部会

目 次

1 府立高校が果たすべき役割

- (1) 府立高校の強み
- (2) 府立高校において実現すべき教育
- (3) 府立高校が果たすべき役割

2 施策の方向性

- (1) 府立高校の充実
 - ① 社会のリーダー層やグローバル人材に必要な資質・能力の育成
 - ② 多様な学習と幅広い進路選択が可能となる学習メニューの提供
 - ③ 「ものづくり」をはじめとする職業人の育成
 - ④ 「セーフティネット」の整備と「セカンドチャンス」の提供
 - ⑤ キャリア教育の推進とチャレンジ精神の育成
 - ⑥ 自立を支援する教育カリキュラム
 - ⑦ つながりをはぐくむ学校づくり
 - ⑧ 学習環境の整備
- (2) 活力ある学校づくりをめざした府立高校の再編整備
 - ① 基本的な考え方
 - ② 再編整備の進め方
 - ③ 教育内容の充実
- (3) 公平でわかりやすい入学者選抜の改善

3 資料（※別途作成）

- (1) 開催概要
- (2) 専門部会の構成
- (3) 参考資料

1 府立高校が果たすべき役割

(1) 府立高校の強み

①豊富な教育ストック

- ・府立高校については、昼間の高校が139校（府内にある高校260校中）、夜間定時制の課程が15校（府内にある高校21校中）、公立では唯一の通信制の課程を設置している（平成24年5月現在）。
- ・研究・研修機関としての大阪府教育センターや、工業実習棟をはじめとする様々な学校施設を有している。
- ・教材や指導方法の工夫・改善の蓄積に基づき、豊かな教育活動を展開している。

②幅広い学びの提供

- ・多様な専門学科・専門コースを設置し、他府県では例をみない学科や、全国トップレベルの実績をあげている学科もある。
- ・勉学と部活動の両立や特色ある行事などを通して、幅広い教育の機会を提供し、バランスのとれた人間形成に努めている。
- ・理数教育、キャリア教育、環境教育など内容豊かな教育を展開している。

③多様性の尊重

- ・「自立支援推進校」や「共生推進校」の取り組みをはじめ、「中国帰国生徒及び外国人生徒入学者選抜」を実施するなど、互いの違いを認め合い、生徒一人ひとりの力を伸ばす教育を実践している。
- ・習熟度別学習や少人数指導など、生徒の実態に応じた指導を行っている。

④地域や外部機関とのつながり

- ・地域に開かれた学校づくりに取り組み、学校協議会などを通じて地域とのつながりを深め、信頼関係の強化に努めている。
- ・中学校や大学をはじめとする学校間連携や企業との連携にも積極的に取り組んでいる。

(2) 府立高校において実現すべき教育

- 府教育委員会は、「卓越性」と「公平性」を高水準で両立し、府立高校全体の教育の質の向上をめざしてきた。また「多様性の尊重」は、これまで大阪の教育が大切にしてきたことであり、府立高校の強みのひとつである。
- 府立高校が果たすべき役割を明らかにするにあたっては、「卓越性を活かす教育」「公平性を備える教育」「多様性を尊重する教育」という3つのキーワードを基本的な視点とすべきである。

- 「卓越性」には、「グローバル社会で活躍できる人材などリーダー層の生徒の能力をさらに伸ばす」という意味と、「すべての生徒の持つ能力を最大限に伸ばしていく」というふたつの意味がある。
「公平性」についても、「生徒が置かれている経済的状況にかかわらず、高校教育の機会を保障する」という意味と、「府立高校全体の教育達成度を引き上げる」というふたつの意味がある。
- 府立高校全体においても、また、個々の学校の中でも、それぞれに「卓越性」と「公平性」の両立を追求すべきである。
- 「多様性」は、共に生きる「共生」の考え方のもと、互いの違いを認め合い、生徒一人ひとりが尊重される教育を大切にしていこうという意味である。
- 「卓越性」「公平性」「多様性」という理念を具現化するということは、
 - * どのような学力の生徒にも、どのような経済的状況にある生徒にも、その生徒のニーズに的確に応える選択肢を用意すること
 - * すべての生徒の能力を十分に伸ばすこと
 - * 義務と責任を果たす市民として育成し、社会に送り出すことを実現するということである。

(3) 府立高校が果たすべき役割

①グローバル社会で活躍できるリーダー層の育成

- これからの日本や大阪をリードし、世界で活躍できるグローバル人材として、幅広い教養と豊かな人間性、高い志と社会貢献意識を持つ骨太の人材を育成する必要がある。

②大阪の多様な社会経済基盤を支える人づくり

- 社会の様々な場面で活躍し、将来の大阪を支えていくことができる知識や技術・技能、意欲を兼ね備えた人材育成が求められる。

③置かれている環境にかかわらず、社会的経済的に自立して生きていく人づくり

- 家庭の経済事情などにより困難な状況にあっても、一市民として自らが社会的経済的に自立して生きていくことのできる人材を育成する必要がある。

2 施策の方向性

(1) 府立高校の充実

① 社会のリーダー層やグローバル人材に必要な資質・能力の育成

- グローバル人材に必要な力を身につけるためには、英語に接する機会を増やすだけでなく、異文化理解を深め、コミュニケーション能力、チャレンジ精神などを育成することが必要である。また、その基礎となる、母語で自らの意見を述べる力を伸ばすことも非常に重要である。
- リーダー層の育成には、知識や技能を与えることにとどまらず、子どもたち自身が探究していく環境をつくるという観点が大切である。
- 国際的には、グローバルリーダーの育成をめざす学校において国際バカロレア資格の取得に向けた取組みを進めている例も多いことから、将来的に、国際バカロレアの趣旨を踏まえたコースやプログラム等を作っていくことも検討すべきである。
- 進学指導特色校 (GLHS) については、今後、取組みの成果の検証も踏まえ、対象校を拡大することや、普通科と文理学科の併置から、文理学科単独校へ移行することについても検討すべきである。

② 多様な学習と幅広い進路選択が可能となる学習メニューの提供

- これからの社会で生きていくうえで、国際化や情報化の進展に対応することは、すべての学校において必要なことである。
- 特別非常勤講師や外国人指導助手など外部人材の活用については、授業はもとより、キャリア教育や部活動などにおいても教育効果が高いことから、いっそう充実を図っていくべきである。
- 生徒にとって「魅力的な授業」「わかる授業」を実現するため、授業評価を活用した授業改善やカリキュラム研究を進めることが求められる。

③ 「ものづくり」をはじめとする職業人の育成

- 工科高校は、専門性をさらに極める「深化」と、より高度な技術を学ぶための大学等への「接続」をめざすという理念の実現に向けて、改革は順調に進んでいる。実社会で役立つ資格が取得できることが評価されている現状も踏まえ、今後も工科高校の取組みの充実が望まれる。
- 工科高校・農業高校の生徒は、実社会とつながる貴重な学びを体験しており、それぞれの学校でこのような取組みの充実を図ってもらいたい。

④ 「セーフティネット」の整備と「セカンドチャンス」の提供

- 学習面のつまずきや不登校経験等の様々な困難に直面しながらも、高校で学ぶ意欲を持った生徒に高校就学の機会を確保するよう、「セーフティネット」の整備が必要である。
- 社会的経済的に自立した人材の育成には、その前提として、基礎基本を着実

に身につける必要があることから、義務教育段階での学習内容の学び直しを支援することが求められる。

- 学び直しを支援する学校においては、多様な生徒に対応するため、生徒のメンタル面でのサポートをはじめ、専門性の高いスキルやノウハウを有する人材が必要となる。
- 学び直しを支援する学校の整備にあたっては、いっそう教育効果があがるよう、一定のルールやハードルを設けることなどに留意すべきである。
- 様々な事情から、他校への転学を希望している生徒や、いったん社会に出た後、再度、高校での学習を希望する者は、潜在的には多数にのぼると思われる。
- 現在、一部のクリエイティブスクールや通信制等の入試において、21歳以上の受検者への特別措置や、編転入枠が設けられているほか、私立高校を含め、府内の高校間での転学機会が設けられているが、学ぶ意欲を持つ者に対して、それぞれの状況に応じた学び直しの機会、いわゆる「セカンドチャンス」が提供できるよう、制度の一層の充実が求められる。
- 「セカンドチャンス」を提供するにあたっては、生徒がつまずきを繰り返さないよう、ソーシャルスキルトレーニングなど、学び直しを支援するための取組みを充実させることが重要である。

⑤ キャリア教育の推進とチャレンジ精神の育成

- 高校では、卒業後に就職する生徒はもちろん、すべての生徒に対して将来を見通したキャリア教育を実施することが必要であり、インパクトのある教材や外部人材の活用・配置など、もう一步進んだ取組みが求められる。
- 学力に自信がない生徒の中には、現実に対するあきらめから「将来の夢が持てない」状況に陥ることもあることから、基礎的な学力をしっかりと身に付けることが肝要である。基礎的な学力を身に付けることで、キャリア教育が実を結びチャレンジ精神の育成にもつながると考えられる。

⑥ 自立を支援する教育カリキュラム

- 障がいのある生徒や外国にルーツのある生徒をはじめ、様々な状況にある生徒をしっかり支え、持てる力を最大限伸ばす取組みを進めることは、これまで府立高校が大切にしてきたことである。
- 様々な課題を有する生徒への支援にあたっては、一人ひとりの生徒にしっかりと寄り添わなければならない。そのためには、スクールカウンセラーなどの人材を増員し、必要な学校に対してはスクールソーシャルワーカーの配置を検討するなど、学校のサポート体制の充実に継続的に取り組む必要がある。
- 「自立支援推進校」や「共生推進校」については、障がいのある生徒・周囲の生徒がともに、自身の可能性を伸ばしていくことができる取組みとして重要である。また、今後、高校と支援学校を併置するという形態に関しても、他県事例を参考にしながら、併置することによる教育効果等について検討することが望まれる。

⑦ つながりをはぐくむ学校づくり

- 小・高間、中・高間など、異なる校種間の連携については、高校生が自己有用感を高め、積極的に他者と関わるきっかけづくりになるという意味から、非常に重要である。また、教員が相互に授業見学を実施することなどを通じて連携を強化していくことは、課題を共有し、継続的に教育効果を高めていくことにつながることから、積極的に推進すべきである。
- 高大連携、地域や外部の機関・人材との連携については、これまでも府教育委員会が支援している。今後も学校の活性化のため、さらに充実を図っていくことが求められる。
- 中高一貫教育については、大阪の教育が地域とのつながりを大切にしてきたという経緯から、これまで連携型を進めてきている。能勢・柏原地域での取り組みの実績も踏まえつつ、今後のニーズや他府県の事例も勘案しながら、中高一貫教育のあり方について研究を続けていくことが望ましい。

⑧ 学習環境の整備

- 建物の実態を踏まえた老朽化対策が不可欠であるが、例えば洋式トイレの設置など、学校の設備については、時代の変化に応じた対応も必要である。
- 学習効果を高めるためには、ICT 機器の充実・活用が不可欠であり、活用目的を明確にしたうえで、活用方法についての専門的な支援を行う体制づくりが必要である。

(2) 活力ある学校づくりをめざした府立高校の再編整備

① 基本的な考え方

- 今後、平成 26 年をピークに生徒数の減少が見込まれることから、府立高校の配置の適正化が求められるが、再編整備を行う場合であっても、より府民の役に立つ学校をつくっていくという観点が不可欠である。
- 高校の再編整備については、教育の普及と就学機会の確保を前提として、「卓越性を活かす教育」「公平性を備える教育」「多様性を尊重する教育」の実現をめざし、教育内容の充実と学校数の精査を両輪として進めていくべきである。

② 再編整備の進め方

《府域全体》

- 府域全体の学校数を見直すにあたっては、高校進学における公立・私立の選択に影響を与える多くの要素があることを十分に踏まえる必要がある。
- 学級規模のあり方については、教育課程や教育活動、施設条件等から検討する必要がある。普通科の学級規模については、6 学級から 8 学級を基本とし、学校の実情を踏まえて柔軟に運用すべきである。

《個別校》

- 個別校の精査にあたっては、学校の特色や地域の特性を踏まえて配置のあり方を検討する必要がある。

- 各学校の特色については、志願動向だけで判断するのではなく、その学校の役割・使命を十分果たせているかどうかという観点で積極的に評価すべきである。
- 学校配置の地域バランスについては、通学区域撤廃後も、現在の区域割りを前提にするなど、一定の地域単位で検証することが望まれる。

③ 教育内容の充実

- 高校等への進学率が98%となっている現在、高校教育を「普通教育」と「職業教育」に単純に二分化する状況ではない。「普通教育」も進路ニーズに対応し、専門コース等を作ることによって、多様化したものになっている。
- 府教育委員会は、これまで学校の特色づくりにより、多様なタイプの学校を提供してきたが、学校内での多様性を尊重するためには、入学後に進路選択できるようにすることもひとつの方策である。
- 時代の変化に対応するため、現在設置している学科等を検証し、教育内容の充実をいっそう進めていくべきである。
- 学校の教育活動を客観的に評価する必要があることから、評価指標を設定することも検討するべきである。
- いずれの学校タイプにおいても、学校の取組みを十分に理解してもらうため、中学生や保護者をはじめとする府民に対し、より積極的な情報発信に努めることが必要である。

《普通科高校》

- 高校の特色づくりには、専門学科やコースの設置という教育課程上の工夫にとどまらず、部活動や行事などの様々な教育活動を充実させることも考えられる。普通科高校においても、教育活動の充実等にしっかりと取り組むことにより、学校の特色づくりは十分可能である。
- 学校の使命（ミッション）を改めて定義し直し、「本校ではこういう人材を育てる」という明確なメッセージを発することが必要である。

《普通科総合選択制》

- 普通科総合選択制については、生徒の進路状況をみると、進学や就職など多様な進路を実現している学校と、大学等への進学が中心の学校に大きく分かれている。このような生徒実態に対応し、その教育効果がいっそう発揮されるよう、教育課程の大幅な変更や、総合学科等への改編など、発展的に整理されることが望まれる。

《専門高校・専門学科》

- 工科高校は「ものづくり教育コンソーシアム大阪」において、農業高校は「大阪における農業教育のあり方懇話会」において、それぞれ今後のあり方が検討されていることから、これらの議論を踏まえて、取組みの方向性を示していくことが望まれる。

- 国際系の学科（国際教養科・国際文化科・国際科）に関しては、社会や時代の変化に対応し、充実を図るとともに、中学生・保護者にとってのわかりやすさという観点を踏まえながら、名称の統一や教育課程の見直しなどを検討する必要がある。
- 社会的課題のひとつである「防災のまちづくり」といった、これからの社会のニーズにあった学科の設置について検討することも、高校の魅力づくりにおける新たな切り口になると考えられる。

《総合学科》

- 府内の総合学科高校は、「産業社会と人間」を基軸としたキャリア教育や多様な科目の展開、授業方法の工夫などを行っており、全国的にも高い評価を得ている。志願倍率、在籍生徒の満足度がともに高いことから、さらなる充実が望まれる。
- 総合学科については、人的・物的支援に見合った教育活動が十分になされているか、検証する必要がある。

《「セーフティネット」の役割を担う学校》

- 高校就学の「セーフティネット」の役割を担う学校については、これまで定時制・通信制に加えて柔軟な学びのシステムを持った昼間の学校としてクリエイティブスクールを位置づけてきた。近年、昼間の高校への進学率が上昇し、昼間の高校の生徒がいっそう多様化していることから、学習内容の学び直しを支援する学校の必要性が高まっていると考えられる。
- 通信制の課程については、昼間部における志願倍率が高い水準で推移していることから、受検者のニーズに十分応えられるよう拡充を図る必要がある。
- 今後、クリエイティブスクールなどの既存の枠組みを再構築し、「セーフティネット」の役割を担う学校のさらなる充実策を講じることが望まれる。

(3) 公平でわかりやすい入学者選抜の改善

- 当面の課題に対応するため、平成 25 年度選抜から新しい制度の導入が予定されていることから、さらなる改善方策については、新制度の定着状況を見極める必要がある。
- 今後も、選抜環境が変化する可能性があることから、制度改善の際には、受検者のニーズや動向を踏まえながら、改めて制度の検証・検討を行うべきである。将来的には、他府県事例を参考に、例えば、前期選抜と後期選抜の一本化など、抜本的な制度改善についても検討が必要である。
- 制度改善にあたっては、中学校教育に与える影響には十分配慮することが望まれる。